

# 『学び合い』キャリア教育授業における特別な支援を要する児童の変容に関する事例的研究

西澤 尚輝\*・深山 智美\*\*・西川 純\*\*\*

(平成30年9月20日受付；平成31年4月9日受理)

## 要 旨

本研究は、キャリア教育の授業において、通常学級に在籍している自閉症、ADHDの診断を持つ児童に対して『学び合い』の授業実践を行った。その結果、相互的会話が多く現れ、キャリアに関する会話が増加し、職業的観点からキャリアに関する考えを持ち、日常生活にも変化が見られることが明らかとなった。

## KEY WORDS

career education キャリア教育, “Manabiai” 『学び合い』, Autism Spectrum Disorder 自閉症スペクトラム, ADHD 注意欠陥多動性障害, elementary school 小学校

## 1 問題の所在

中央教育審議会(2011)は、「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割や価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」と定義し、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」をキャリア教育としている<sup>(1)</sup>。

また、「社会生活の中で自らの役割や、働くこと、夢を持つことの大切さの理解、興味・関心の幅の拡大が重要であり、働くことの意義を理解することや、自分ができることや、したいことを理解し行動することなどが必要」ということを、小学校におけるキャリア教育推進のポイントとしている<sup>(2)</sup>。このことは特別支援教育においても同様である。

特別支援教育におけるキャリア教育推進のポイントは「発達障害を含め障害のある児童生徒に対し、その自立や社会参加に向けて持てる力を伸ばすという観点から、個々の障害の状態に応じたきめ細かい指導・支援の下で、適切なキャリア教育を行うことが重要である」としている<sup>(3)</sup>。

また、文部科学省(2012)は、「学習面、生活面、行動面及び対人関係において著しい困難を示す子どもは、約6.5%の割合で存在している」と述べており、「近年の小学校現場においては通常学級に在籍する子どもに加え、発達障害の子ども並びに気になる子どもが混在している状況にある」としており、共生社会の実現に向け特別支援教育は必要不可欠なものとしている<sup>(4)</sup>。

小学校特別支援教育におけるキャリア教育の実践として、稲垣(2012)は、一日の流れに見通しをもたせることで、仕事や学習への意欲を高める実践を行っている。また、就労した際の習慣作りを目指した取り組みとして活動後、お楽しみの活動を取り入れる実践を行った<sup>(5)</sup>。

浅川ら(2017)は、夢を持つことの大切さの理解や、自分ができることやしたいことの理解に当たる部分及びその変化を継続的に観測した実践を行った。浅川は特別支援学級に在籍する児童と「幸せ」についての対話を重ねる実践を行い、自身のキャリアについて具体的な考えを持たなかった児童が、職業を含む様々な観点からキャリアへの考えを持つようになったことを明らかにした<sup>(6)</sup>。

以上のように、小学校特別支援教育におけるキャリア教育は就労に向けた習慣作りや、教師と子どもの直接的対話によって、特別支援学級に在籍する児童の夢を持つことの大切さの理解や、自分ができることやしたいことの理解を培う実践は行われているが、通常学級において特別な支援を要する児童を含む全ての児童にキャリア意識を醸成させる研究は行われていない。

そこで着目したいのが、通常学級において軽度発達障害をもつ児童への有効性を明らかにした『学び合い』である<sup>(7)</sup>。『学び合い』とは、西川(2016)の提唱する実践理論である<sup>(8)</sup>。

\*高知県香南市立野市小学校 \*\*長崎県佐世保市立相浦西小学校 \*\*\*学校教育学系

通常学級において、軽度発達障害の児童生徒に対しての支援に関する実践を行った小日向ら(2008)によると、軽度発達障害をもつ児童にとって『学び合い』の授業は、かかわり合いを保証する授業が展開されることによって、クラス全体のかかわり合いが上昇し、その結果として軽度発達障害児のかかわり合いが上昇することを報告している。軽度発達障害をもつ児童への『学び合い』の授業が有効に機能することが述べられている<sup>(9)</sup>。

三崎ら(2012)によると小学校3年生理科の『学び合い』の授業によって、通常学級にいる「気になる子」に対しての相互的会話が多くあられ、周りの児童との意識的なかかわりが増加し、自分を受け入れてくれる環境によって周りの児童にかかわる意識が高まったことを明らかにしている<sup>(10)</sup>。

しかし、発達障害の児童生徒に対する『学び合い』授業の有効性は明らかになっているが、学習者同士の自由な相互行為を保証した『学び合い』キャリア教育による通常学級に在籍する自閉症、ADHDの診断をもつ児童の学びの姿や変容は明らかになっていない。

## 2 研究の目的

本研究では、通常学級にいる自閉症の診断を有する小学校4年生の児童が、『学び合い』キャリア教育の授業によって他児童とのかかわりや会話数が増加し、自身の将来や現在の行動についての考えを巡らせることが出来るようになることを明らかにすることを目的とする。

## 3 研究の方法

### 3.1 調査対象

A県B小学校 第4学年 自閉症スペクトラム、ADHDの診断を受けている児童(本研究では、以後A児と呼ぶ。)

### 3.2 調査期間

平成29年6月～平成30年2月

### 3.3 調査方法

調査対象児童が所属している学級の児童全員にICレコーダーを配り、『学び合い』によるキャリア教育を総合的な学習の時間で計9回行った時の授業中の会話をボイスレコーダーとビデオカメラで記録した。

また、保護者から見たA児の変化を明らかにするため、保護者へのインタビュー調査を行った。

### 3.4 授業手続き

#### 授業者の情報

教職歴31年 『学び合い』実践歴9年

#### 授業スタイル

西川の提唱する『学び合い』授業のスタイルで総合的な学習の時間に実施した。

『学び合い』授業は、「子どもは有能である」という子ども観に立ち、教師は「目標の設定」「評価」「環境の設定」を行い、それ以外の学習活動は子どもに任せるスタイルである。

教師による目標の設定、子どもたちによる課題解決活動、教師による活動の振り返りの流れで授業を行う。

1時間の授業の流れ(及び時間)は、教師による目標の設定5分、課題解決活動20分、教師による活動の振り返り5分である。調査対象校の事情により、総合的な学習の時間は30分となっている。

単元指導計画と各時間のねらいを表1に示す。

単元指導計画は、浅川ら(2017)を参考に、キャリア教育の目標に照らし合わせ、共同研究者である学級担任とともに設定した。

なお、7、8時間目は授業編成の都合上2時間連続して授業を行っている。

表1 単元指導計画

|      |   |
|------|---|
| 1時間目 | 将来の幸せを考えましょう<br>ねらい：A児の将来の幸せについての考えを探る  |
| 2時間目 | お家の人や大人の人が考える「子どもの将来の幸せ」はどんなことかインタビューしてみましょう（保護者参観）<br>ねらい：保護者の考える将来の幸せを聞くことによって、自身の将来の幸せについての考えを広げる      |
| 3時間目 | どうしたら将来幸せになれるか考えましょう<br>ねらい：将来幸せになるための具体的な行動を考える  |
| 4時間目 | 将来「幸せ」になるために、今そのことが分からない人に分かってもらうためにはどうしたらいいか考えましょう<br>ねらい：A児の将来の幸せに関する考えを持たせる                            |
| 5時間目 | 将来の幸せのために何かしていますか<br>みんなが幸せになるために何かをしているか考えましょう<br>ねらい：A児に将来の幸せのために今何をしたらいいのか考えを持たせる                      |
| 6時間目 | 将来みんなが幸せになるために、今何もしていない人にしてもらうためにどうしたらいいか考えましょう<br>ねらい：学級の全員が幸せになるために今どうしたらいいのか考えを持たせる                    |
| 7時間目 | 二十歳みんなの成人式でみんなが幸せになるために、今みんながみんなのために出来る事を考えましょう<br>ねらい：学級の全員が幸せになるために今どうしたらいいのか考えを持たせる<br>職業的観点からA児の幸せを探る |
| 8時間目 | おうちの方へ発表するための発表原稿を作りましょう<br>ねらい：二分の一成人式に向けた発表原稿を作成する  |
| 9時間目 | 二分の一成人式でおうちの方へ発表した感想を話し合ひましょう<br>ねらい：保護者発表を終えての振り返りを行う  |

## ①教師の主な働きかけ(第1時の例)

表2 『学び合い』によるキャリア教育授業

|                 |  |
|-----------------|--|
| 目標の設定<br>(学習課題) | 第4学年総合的な学習の時間<br>「自分にとって将来の幸せとは何かを、全員が説明できるようになる。」 |
| 活動の可視化          | 教師による声かけ(児童同士のかかわりを促す声かけを中心に。)                     |
| 評価              | 課題を達成したかを授業の最後の全体への確認及びワークシートへの記述で確認               |

## 3. 5 分析方法

分析1では、計9回の『学び合い』キャリア教育授業のA児の発言をプロトコルに起こし、前期(1～3時間目)、中期(4～6時間目)、後期(7～9時間目)に分けた。それぞれの期間のA児の発言から、A児が自身のキャリアをどう考えているのかを分析し、その変化を辿った。

分析2では、計9回の『学び合い』キャリア教育授業のA児の発言をプロトコルに起こし、三崎らの手法に準拠し、会話を相互的会話、一方的会話、受け入れ会話、非難的会話、無視行動、注意、独り言のカテゴリーに分類した。それぞれの会話のカテゴリーの調査期間における変化を分析する。

分析3では、計9回の『学び合い』キャリア教育授業のA児の発言をプロトコルに起こし、A児がキャリアに関する会話をした回数の調査期間における変化を明らかにする。

分析4では、A児が『学び合い』キャリア教育の授業を経て、受けた印象をA児の保護者にインタビューし、内容をプロトコルに起こして保護者の考えを分析した。

## 4 研究の結果・考察

### 4.1 分析1

#### 4.1.1 目的

前期、中期、後期の期間中のA児の発言から、A児が自身のキャリアをどう考えているのかを分析し、その変化を明らかにする。

#### 4.1.2 分析方法

計9回の『学び合い』キャリア教育授業のA児の発言をプロトコルに起こし、前期(1～3時間目)、中期(4～6時間目)、後期(7～9時間目)に分けた。それぞれの期間のA児の発言から、A児が自身のキャリアをどう考えているのかを分析し、その変化を辿った。

#### 4.1.3 結果

##### (1) 前期のA児のキャリアについての考え

表3 前期のA児のキャリアについての考え

|  |
|--|
| <p>B1：じゃあAくんの好きなことって何？<br/> A1：ほら。僕もう書いたよ(ワークシートに)。はてな、はてな、うんこ、ちんこ、けつ、はてな。<br/> C1：うんこ、ちんこ、けつ。<br/> B2：これもう録音されとるよ。<br/> C2：いまいったことぜんぶ。<br/> A2：あ、21分(録音開始からの時間が)。</p> |
|--|

表3より、A児はB児に好きなことを聞かれても、キャリアとは関係のないことをワークシートに記述し、キャリアの話題から話をそらし、キャリアについて考えようとしていないことが明らかになった。

表4 前期のA児のキャリアについての考え

|  |
|--|
| <p>T1：ゲームをやめてください。今日いま何する時かわかってる？<br/> A1：何が？<br/> T2：話し合いする時だよ。<br/> A2：だって話す人おらんもん。<br/> T3：Aさんから話そうって言わないと。<br/> A3：やだ。</p> |
|--|

表4より、A児は授業内容と関係のない遊びをして担任に注意されている。また、他の児童との話し合いを促されるもそれを嫌だと拒否していることが明らかになった。

##### (2) 中期のA児のキャリアについての考え

表5 中期のA児のキャリアについての考え

|   |
|---|
| <p>A1：将来の夢は？<br/> B1：運転手。<br/> A2：何の運転手？<br/> B2：何かの。</p> |
|---|

表5より、A児は自分から他の児童へ将来の夢について質問に行き、職業的観点から自身の将来のキャリアへの考えを深めていることが明らかになった。

## (3) 後期のA児のキャリアについての考え

表6 後期のA児のキャリアについての考え

|   |
|---|
| C 1 : (A児が将来就いたらいいと思う職業について)ユーチューバー <sup>1)</sup> (になったらいいんじゃない?)。ユーチューバー、実験とか。 |
| A 1 : ユーチューバーだったらゲームしかせんよ。  |
| C 2 : ならユーチューバーでええやん。ユーチューバーで。  |
| A 2 : <u>たぶんカービーしか投稿せんよ。</u>  |
| C 3 : それでいい。やけん、ここに(ワークシートに)ユーチューバーって書こうか。                                      |
| (中略)  |
| C 4 : どういう人が必要?   |
| D 1 : 必要だと思う?   |
| C 5 : ユーチューバーに協力してくれる人とか?   |
| A 3 : 違う。 <u>ユーチューブに詳しい人。</u>   |
| (中略)  |
| C 6 : 将来の仲間作りのために今どうしたらいいと思いますか? 3つ書きましょう。                                      |
| A 4 : 無理。   |
| D 2 : 3つじゃなくてもいいんだ。1つでも。  |
| C 7 : 1つでもいいよ。  |
| A 5 : やだ。何もない。  |
| C 8 : 仲間づくり。親切にするとか、大切にするとか。  |
| (中略)  |
| C 9 : 友達を大切にする?   |
| A 6 : 知らん。  |
| C 10 : もしその人がユーチューバーで有名になったら教えてもらえるやん。  |
| A 7 : うん。 <u>。</u>  |
| C 11 : <u>そしたら友達を大切にする。</u>   |

表6より、ユーチューバーになったらどうかという職業的観点からA児はキャリアについての会話している。自身の将来就きたい職業はユーチューバーであることが明らかになった。

また、将来ユーチューバーになるために、今友達を大切にするという考えを持ったことも明らかになった。

9回目の授業時のワークシートには、「自分が考えている仕事が無くなったらそうしたらいいと思いますか?」の問いに対し、「日本でなかまをあつめる」「かいがいでなかまをあつめる」「きかいにたよりすぎだっってこうぎする」と記述しており、仲間を大切にすることが大切だという考えを持っていることが明らかになった。

以上のことから、A児は『学び合い』キャリア教育授業の回数を重ねることにより、仲間の大切さ及び、職業的観点から自身のキャリアについての考えを持てるようになったことが明らかになった。

## 4. 2 分析2

## 4. 2. 1 目的

分析1で明らかになったように、A児がなぜキャリアについての考えを持てるようになったのかを明らかにするため、A児の計9回の『学び合い』キャリア教育授業のA児の発言をプロトコルに起こし、それぞれの会話カテゴリーの調査期間における変化を分析する。

## 4. 2. 2 分析方法

本研究での毎時間のビデオカメラとICレコーダーの記録を基に、9時間分の調査対象児童の会話についてプロトコルを作成した。

そして、三崎らの手法に準拠し、会話を相互的会話、一方的会話、受け入れ会話、非難的会話、無視行動、注意、独り言の7つのカテゴリーに分類した。それぞれの会話のカテゴリーの調査期間における変化を分析する。図5は、7つのカテゴリーに分類する会話の分類基準を示している。

なお、本研究では1会話を、同じカテゴリーで分けられる1つの会話のまとまりとする。なお、一連の会話の中でも、会話のカテゴリーが変化した場合には、そこで会話を切り、そこまでの会話を1会話とし、その後続く会話を

ほかの1会話として分類することとする。

また、カテゴリーを分ける際には、カテゴリー作成者(第一筆者)と、この研究の研究内容を知らない大学院生2名の3名で行った。一致率は84%で妥当性を担保した。一致しなかった記述は、分類した3名で協議を行い確定した。

表7 各カテゴリーに分類される代表的な会話の事例

|         |   |
|---------|---|
| 相互的会話   | 調査対象児童が、聞き手(児童・担任)に話しかけたり、話しかけられたりすることをきっかけとして、教えてあげたり、教えてもらったりといったやりとりが見られる場合。 |
| 受け入会的会話 | 調査対象児童が話しかけたときに、聞き手(児童・担任)が、それに対して返答は短くても、返答している場合。                             |
| 一方的会話   | 調査対象児童が、聞き手(児童・担任)に話しかけているとき、聞き手が調査対象児童の話していることを理解する如何に関わらず、調査対象児童が一方的に話している場合。 |
| 非難的会話   | 調査対象児童が、聞き手(児童・担任)に対し、非難的な言葉を発した場合。(うるさい・もういいよ等)                                |
| 無視      | 調査対象児童が、聞き手(児童・担任)に話しかけても、そのまま違う場所に移動してしまったり、見てもその発言にこたえなかったりする場合。              |
| 注意      | 調査対象児童が、児童ないし教師・筆者に注意されている場合。   |
| 独り言     | 調査対象児童の目の前に人がいなかったり、誰かに伝えようとしているような発言ではなかったりする場合。                               |

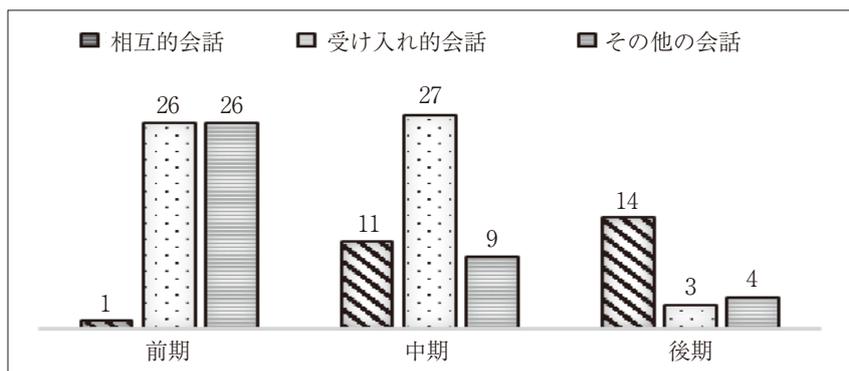


図1 A児の会話のカテゴリーの変容

図6より、A児は前期は相互的会話をほとんどしていなかったが、中期になると相互的会話が増加しはじめ、後期になると授業中の会話のほとんどが相互的会話に変容していたことが明らかになった。

これは、『学び合い』の考えに則り「みんなができる」ことを毎時間の授業の目標設定と活動の振り返りの際に繰り返し求めていたことから、中期から後期にかけて他児童からA児への意識的なかわりが増加し、相互的会話が多く現れるようになったと考えられる。

以上のことから、他児童からのかかわりの増加に伴い、相互的会話が増加することにより、A児は職業的観点から自身のキャリアについての考えを持てるようになったことが明らかになった。

### 4. 3 分析3

#### 4. 3. 1 目的

分析3では、分析2で明らかになった相互的会話の増加とキャリアについての考えを持てるようになったことの詳細を明らかにするため、調査期間におけるキャリアに関する会話をした回数の変化を明らかにする。

#### 4. 3. 2 分析方法

本研究での毎時間のビデオカメラとICレコーダーの記録を基に、9時間分の調査対象児童の会話についてプロトコルを作成した。それを前期、中期、後期に分け、浅川らと中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」を参考に、調査対象児童の実態に合わせて一部改良を加えたカテゴリーに分類し、3つのカテゴリーのいずれかに該当する会話をキャリアに関する会話としてカウントし、調査期間における変化を分

析する。

以下の表8にキャリアに関する会話の分類基準と代表的な会話の事例を示す。

なお、本研究では1会話を、同じカテゴリーで分けられる1つの会話のまとまりとする。なお、一連の会話の中でも、会話のカテゴリーが変化した場合には、そこで会話を切り、そこまでの会話を1会話とし、その後続く会話をほかの1会話として分類することとする。

また、カテゴリーを分ける際には、カテゴリー作成者(第一筆者)とこの研究の研究内容を知らない大学院生2名の3名で行った。一致率は85%で妥当性を担保した。一致しなかった記述は、分類した3名で協議を行い確定した。

表8 キャリアに関する会話の基準

| カテゴリー          | 代表的な発話の事例   |
|----------------|---|
| 職業(働くこと)に関する会話 | A: あなたの夢は?<br>B: 動物博士と体育の先生。                      |
| 自己の理解に関する会話    | B: 先生は?(将来就く職業として)<br>A: セヤケン先生は嫌だ。あとぼく人と話すの苦手やし。 |
| 将来の幸せに関する会話    | B: あなたは結婚したいと思いますか??<br>A: たぶん。                   |

#### 4. 3. 3 結果

表9 キャリアに関する会話をした回数

|            | キャリアに関する発話をした回数(回) |
|------------|--------------------|
| 前期(1～3時間目) | 1                  |
| 中期(4～6時間目) | 11                 |
| 後期(7～9時間目) | 14                 |

表9より、前期はキャリアに関する会話をしたのは、担任との会話1度のみであったが、中期になると他児童からA児へのかかわりが増加し、A児もそれを受け入れ短い言葉での返答ではあるが、キャリアに関する会話をするようになった。後期になるとA児は他児童から話しかけられることによってキャリアに関する会話を多くするようになり、児童同士の自由な相互行為によってA児はキャリアに関する考えを持てるようになったことが明らかになった。

また、図6及び表3より、キャリアに関する発話と相互的会話は一致していることが明らかになった。

以上のことから、A児が職業的観点から自身のキャリアについての考えを持つためには、児童同士の自由な相互行為を保証した学習環境での相互的会話が重要な役割を果たしていることが明らかになった。

#### 4. 4 分析4

##### 4. 4. 1 目的

分析4では、このような変化が起きたA児に、家庭でどのような変化が起きているかを明らかにするため、A児の保護者にインタビューを行い、内容をプロトコルに起こし、A児の家庭での変化を明らかにする。

##### 4. 4. 2 分析方法

保護者へA児の変化に関するインタビューを行い、内容をプロトコルに起こし、A児の家庭及び日常生活での変化を明らかにする。

##### 4. 4. 3 結果

表10 2分の1成人式での発表を見ての感想

|  |
|--|
| T1: 前回のあのなんだろう、9月の時の発表と比べて(2分の1成人式の発表)どんなだったですか? |
| P1: はあ、9月?                                       |
| T2: 9月の社会科のまとめの発表をするって                           |
| P2: ああなんかありましたね。いやいや、ちゃんと喋っていたなと思ってあれにはびっくりしました。 |

表10では、2分の1成人式でのA児の発表を見て感じたことを尋ねている。それに対し、P2のようにA児がみんなの前でしっかりと自分の考えを発表していたことに驚いたと感じていることが読み取れる。このことから、A児が人前で自分の考えを発表できるようになった変化を感じていることが明らかになった。

表11 A児の変化として気付いた点

|   |
|---|
| P1：最近すごい驚かされます。   |
| T1：何かあったんですか？   |
| P2：いやもうなんか色々さっき話したことも色々。  |
| T2：いい方ですね。  |
| P3：そうですね。だいたい、外に出るようになったってのがよくなったなって思って。サッカーしたりとか、やっぱ自分で。                                 |
| T3：そうですね。昼休みにもそうやって自分で外に全員遊びをきっかけに出ているので、そこらへんやっぱ(A児が友達を大切にすると書いていたこと)繋がっているかもしれないですね。うん。 |
| P4：全然違ってきました。(中略)目が違う。  |

表11ではP1より、A児の変化に驚かされていることを感じていることが読み取れる。P3より、外に出て友達とサッカーをして遊んだりするようになったことを変化として感じていることが明らかになった。

以上のことから、保護者にA児の家庭での変化の様子をインタビューすると、授業中に「仲間を大切にするとA児が発言していた通り、今まで外に出て遊ぶことがほとんどなかったA児が、日常生活でも仲間を大切にしてお遊ぼうようになったことが明らかになった。

## 5 結論

以上のことから、浅川らの言う、教師と児童の1対1の対話活動によって特別な支援を要する児童がキャリアに関する考えを持てるようになるのと同様に、児童同士の自由な相互行為を保証した『学び合い』キャリア教育の授業によって他児童とのかかわりや会話数が増加し、自身の将来や現在の行動についての考えを巡らせることが出来るようになることが明らかになった。

## 6 今後の課題

本研究は、小学校中学年単学級を対象にした実践であり、児童の発達段階による違いがあるのか。また、校種による違いはあるのか、それは次の研究課題としたい。

### 注

- 1) ユーチューバーとは、ユーチューブに動画を投稿して収入を得る人のことである。

### 引用文献, 参考文献

- (1) 中央教育審議会：「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」, p.16, 2011.
- (2) 前掲書(1).
- (3) 前掲書(1).
- (4) 文部科学省：「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」, p.11, 2012.
- (5) 稲垣陽子：「小学校特別支援学級でのキャリア教育の取り組み」, 特別支援教育No.46, pp.32-35, 東洋館出版社, 2012.
- (6) 浅川浩佑, 深山智美, 鈴木翔, 西川純：「特別支援学級に在籍する児童の自らのキャリアへの考え方の変容に関する事例的研究」, 臨床教科教育学会誌, vol.17(1), pp.1-8, 臨床教科教育学会, 2017.
- (7) 水落芳明, 小日向文人, 久保田善彦, 西川純：「発達障害を持つ学習者のいる学級における『学び合い』の事例的研究」, 日本教科教育学会誌, Vol.30(4), pp.39-48, 日本教科教育学会, 2008.

- (8) 西川純：「資質・能力を最大限に引き出す！『学び合い』の手引き ルーツ&考え方」, p.83, 明治図書, 2016.
- (9) 前掲書(7).
- (10) 三崎隆, 戸井田未菜, 小松幹, 西川純, 桐生徹, 水落芳明：「理科授業における『気になる子』の『学び合い』の授業による変容に関する事例研究」, 臨床教科教育学会誌, Vol.12(1), pp.55-74, 臨床教科教育学会, 2012.

# A Case Study on Changes of Children Requiring Special Support in “Manabiai” Career Education

Naoki NISHIZAWA\* · Tomomi HUKAYAMA\*\* · Jun NISHIKAWA\*\*\*

## ABSTRACT

In this career education class, we practiced “Manabiai” classes for autistic students enrolled in regular classes and children with diagnosis of ADHD. As a result, many mutual conversations appeared, conversation about carriers increased, it became clear that there is a change in everyday life with career thought from an occupational point of view.

---

\* Konan City Noichi Elementary School \*\* Sasebo City Aiuranishi Elementary School \*\*\* School Education